

韓日両言語の文法化に関する対照研究*

- 文法化の度合いを中心に -

朴江訓**

〈 要 旨 〉

本稿の目的はこれまで研究されてきた韓日両言語の文法化の研究結果をもとに、これまで指摘されたことのない新しい観点の仮説が成り立つことを明らかにすることである。また、これによって、新たな観点の文法化の理論の定立に貢献することである。本稿の主張は以下のようである。

[本稿の主張]

韓日両言語は形態類型論的に同一の膠着語に属するが、韓国語は多くの文法カテゴリーにおいて日本語より文法化の度合いが低い。

本稿は上記の主張を裏付けるために韓日両言語の6つの文法カテゴリー、すなわち(i)否定呼応表現、(ii)アスペクト形式、(iii)文末形式、(iv)複合動詞、(v)複合助詞、(vi)補助動詞の場合を挙げる。また、韓日両言語においてこのような相違点がみられる理由として、(i)形態・統語論的な要因、(ii)各文法カテゴリーの出現時期のずれ、つまり通時的な要因、(iii)言語使用と社会的・文化的認知との相互関係のずれ、に起因する可能性があることを提案する。

論文分野：文法

キーワード：文法化、度合い、頻度効果、形態論・統語論的相違点、通時的アプローチ

1. はじめに

文法化とは、語彙的な意味を持つ単語、すなわち内容語からその意味をなくし文法的な機能のみを担う単語、つまり機能語に変わる変化のことを指し示し、文法化研究というのは、このような変化のプロセス(process)を明らかにする研究分野である。文法化研究は本来、19世紀の歴史・比較言語学の研究にその基盤を置いており、1980年代から欧米を中心に盛んに研究されている言語学の研究分野である。

日本語学における文法化研究は、上述した欧米の一般言語学の影響を受け、1980年代に開始された。実際に1980年に入ってその用語が初めて導入され、本格的な研究は1990年代に入って以来であると考えられる。堀江(2005:93-94)によると、「文法化」という用語は1980年に発刊された「国語学大辞典(1980:860)」に初めて用いられたとされる。しかし、文法化という用語は一般言語学の分野から由来した

* This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government(NRF-2013S1A5A8020921).

** 全州大学校 助教授、日本語学

ものであり、日本語学の分野においても用語は多少異なるが、類似した概念は存在していたとされる。事実、三上(1972)は次のように「形式化」という概念を用いている(堀江(2005))。

或る単語が慣用の結果、一方的な用法に固定して原義からもそれ、時には、品詞崩れも引起す、というような場合にその単語は形式化したという。(三上(1972:194))

韓国語学における文法化の研究動向も上記で見た日本語学の場合と類似しており、1990年代に入ってから本格的な研究が開始されている(이성하(1998))。

一方、韓日両言語の文法化の対照研究は韓国語と日本語の個別言語学的な研究と共に、1990年代後半に入って盛んに行われている。代表的な研究としては、(i)韓日両言語のアスペクト形式を研究した Strauss and Sohn(1998)、安(2001)、安・福嶋(2005)、堀江(2005)、(ii)両言語の文末形式を取り扱った堀江・金(2008)、(iii)複合動詞を取り扱った呉(2004)、塚本(2008)、(iv)複合助詞を取り上げた塚本(2008)、(v)両言語の補助動詞を研究した呉(2004)、塚本(2006)、(vi)否定呼応表現を扱ったPark(近刊)などが挙げられる。ちなみに、上記の安・福嶋(2005)とPark(近刊)は韓日両言語の通時的及び共時的な観点から、他の先行研究は共時的なアプローチから捉えている。

次節で詳しくみるが、これらの研究成果を総合して考えると興味深い言語現象が示唆される。本稿の目的は、従来研究されてきた韓日両言語の文法化研究の結果をもとに、これまで指摘されたことのない新たな視点の仮説が成立することを明らかにすることである。またこれによって新たな視点の文法化理論の定立に貢献することである。ちなみに、今まで韓日両言語の文法化の度合いにおける対照に注目し、両言語の相違点を指摘したのは管見の限りにおいてない。

2. 考察

本稿の主張を次のように先に述べておく。

(1) [本稿の主張]

韓日両言語は形態類型論的に同一の膠着語に属するが、多くの文法カテゴリーにおいて韓国語は日本語より文法化の度合いが低い。

以下では、このような主張が正しいかどうか考察していく。

2.1 否定呼応表現

Park(近刊)は韓・日両言語における否定呼応表現である「밖에」と「しか」の文法化に関する対照研究を行っている。Park(近刊)は通時的及び共時的なアプローチでこれらの表現が「Stage I (否定呼応表現/副助詞)→Stage II (否定呼応表現/副助詞)¹⁾」という文法化プロセスを同様に経ると主張する。また、

1) これに関する内容は後の脚注3で述べる。

Park(2012)はこれらの一連の文法化プロセスは文法化理論の主な原理である、いわゆる「脱範疇化の原理(decategorization principle)」と「一方方向性の仮説(Unidirectionality Hypothesis)」で説明され、韓日両言語の否定呼応表現だけではなく、現代フランス語など、他の言語における否定呼応表現においても普遍的に見られる言語現象であることを明らかにしている。

他方、Park(近刊)は「밖에」と「しか」の文法化現象において、上記のような普遍的な現象に加えいくつかの相違点が存在すると述べる。というのは、両者が否定呼応表現として文法化された時期のずれである。詳しく述べると、「밖에」が否定呼応表現としての用法を担い始めたのは20世紀前期であるのに対し、「しか」の場合は18世紀中期であり、これらの表現は約2.5世紀という時期的な違いがみられる。また、Park(近刊)は韓国語の「밖에」においてこのような時期的な違いがみられるのは、そもそも「밖에」が現れたのが遅かったことも起因すると述べる。ともかく、両者の上述した文法化のずれは大きく2つの言語現象を引き起こす。まず、第一に両言語には次のような構文的な違いがみられる。

[밖에(しか)-아무것도(何も)]

(2)a. *나리타 공항에 도착하고 나서 밖에 아무것도 할 수 없다.

b. 成田空港に着いてからしか何もできない⁽²⁾。

[밖에(しか)-아무도(誰も)]

(3)a. *부장님은 평소 때에도 농담밖에 하지 않으므로, '또 시작되었군' 이라고 밖에 아무도 생각하지 않았다.

b. 部長は普段から冗談しか言わないので、「また始まった」としか誰も思わなかった。

[밖에(しか)-결코(決して)]

(4)a. *자신에게 있어 중요한 것은, 실질적인 체험에서밖에 결코 얻을 수 없다.

b. 自分にとって大切なものは、実体験からしか決して得ることができない。

(2a)は「밖에」がもう一つの否定呼応表現である「아무것도」と共起したいわゆる「多重否定呼応表現構文(Multiple Negative Sensitive Item Constructions)」であるが、非文である。これに対し、日本語は(2b)で見られるように「しか」と「何も」が共起しているが、正文である。ここで一つ不思議な現象がみられる。Si(1997)、Kim(1998)、Sells(2001)など多くの先行研究において韓国語の「밖에」は次のように多重否定呼応表現構文が許されると認められているからである。

[밖에-아무것도]

(5)a. 나는 물건을 흰 종이 밖에 아무것도 보지 못했다. (Kim(1998))

b. 순이는 사과밖에 아무것도 먹지 않았다. (Sells(2001))

(5)は(2a)と同様に「밖에」と「아무것도」が共起した多重否定呼応表現構文であるが、すべて正文である。興味深いことに(5)と(2a)は同様の否定呼応表現が共起しているのにも関わらず、許容度において対照的である。このような現象は以下の例文からでも確かめられる。

www.kci.go.kr

2) 日本語の例文(2b)-(4b)は実例である。また、韓国語の例文(2a)-(4a)は日本語の例文(2b)-(4b)を筆者が訳したものである。

[밖에-아무도]

(6)a. 지금 집에 엄마밖에 아무도 안 계세요. (시(1997))

b. 이것 밖에 아무도 읽지 않는다. (Sells(2001))

[밖에-결코]

(7)a. 노인들밖에 결코 이곳을 찾지 않는다. (김(1998))

b. 부탁에 능란한 사람은 처음에는 상대방이 가볍게 응해 주는 작은 부탁밖에 결코 하지 않는다.

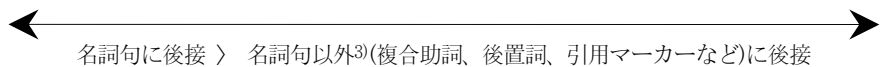
(6)は(3a)と同様に「밖에」と「아무도」が、(7)は(4a)と同様に「밖에」と「결코」が共起した場合であるが、(6)(7)は(3a)(4a)と異なり正文である。ここで「(2a)(3a)(4a)と(5)(6)(7)における構文論的な相違点は何であるのか」という疑問点が浮かび上がる。両者の違いは、「밖에」がどのような項目に後接しているのかである。言い換えると、(5)(6)(7)における「밖에」は名詞句に後接するのに対し、(2a)(3a)(4a)における「밖에」は名詞句以外のもの、例えば(2a)の複合助詞(-하고+나서)、(3a)のような引用マーカ(-라고)、それから(4a)のような後置詞(-에서)に後接する。このような言語現象に着目し、Park(近刊)は「밖에」が名詞句に後接する場合は多重否定呼応表現構文が許されるが、名詞句以外の項目例えば、複合助詞、後置詞、引用マーカなどに後接する場合は多重否定呼応表現構文が許されないと指摘する。これに対し、「しか」は複合助詞、後置詞、引用マーカなどに許されると述べる。このような現象は統語論的または意味論的分析では決して説明できない不思議な現象である。

本稿は両言語において上記のような相違点がみられる理由は、韓国語の「밖에」が「しか」より文法化の度合いが低いからであると考えられる。Park(近刊)と朴(2013)は「밖에」と「しか」を含め韓日両言語における副助詞がどのような項目に後接するのかに注目し、これらの副助詞は下記のような文法化のプロセスを示すと主張する。

[韓日両言語における副助詞の文法化]

〈図1〉 低い

高い



第二に、「밖에」の使用頻度が「しか」より低いことが挙げられる。Bybee(2001)(2003)は文法化の度合いを測定するに当たって「頻度効果(Frequency Effects)」という原理が有効であると主張する。「頻度効果」とは、ある表現の使用頻度は当該表現の文法化の度合いと直結し、当該表現の文法化の度合いが高いと、その使用頻度も高いということである。Park(近刊)は「밖에」と「しか」は次の表のように使用頻度において相違点がみられると指摘する。

www.kci.go.kr

3) 朴(2013)はこの中でも文法化のハイアラキーのようなのが存在すると指摘する。例えば、後置詞の場合、「一次後置詞への後接」二次後置詞への後接」のような文法化のプロセスがみられる。詳細は朴(2013)を参照。

〈表1〉 a. 英語の小説(Harry Potter and the Sorcerer's Stone)を訳した韓国語と日本語

i. 小説のタイトル	해리포터와 마법사의 돌	ハリー・ポッターと賢者の石
ii. 表現	밖에	しか
iii. 頻度数	22回	54回

b. 日本語の小説(ノルウェーの森)を訳した韓国語

i. 小説のタイトル	노르웨이의 숲	ノルウェーの森
ii. 表現	밖에	しか
iii. 頻度数	68回	91回

c. 韓国語の小説(短編小説: 뽕)を訳した日本語

i. 小説のタイトル	뽕	ボン
ii. 表現	밖에	しか
iii. 頻度数	2回	3回

d. 韓国語と日本語の小説

i. 小説のタイトル	착한 여자(449,793자)	白夜行(466,732자)
ii. 表現	밖에	しか
iii. 頻度数	41回	70回

〈表1a〉は英語の小説を韓国語と日本語に、〈表1b〉は日本語の小説を韓国語に、〈表1c〉は韓国語の小説を日本語に訳したもので、それから〈表1d〉は韓国語と日本語でそれぞれ書かれた小説の場合である。(表1a-d)から「밖에」の使用頻度が「しか」より低いことが分かり、このことは「頻度効果」により「밖에」のほうが「しか」より文法化の度合いが低いことを示唆する。

2.2 アスペクト形式

安(2001)は韓日両言語のアスペクト形式である「-어/고 있다」と「-ている」の文法化の対照研究を通時的及び共時的アプローチで行っている。また、安(2001)は韓日両言語のアスペクト形式は文法化理論の原理の中で「脱範疇化の原理」、「漂白化モデル(bleaching model)」、「語形の縮約(contraction)」が関わっていると述べる。例えば、韓日両言語のアスペクト形式において「語形の縮約」は次のような存在動詞の形態的縮約によって成り立っていると指摘し、通時的データでこのことを裏付けている。

(8)a. 韓国語: -어 잇-> -엇- > -었- > -었-

b. 日本語: テアリ > タリ > タ

また、安(2001)は韓日両言語のアスペクト形式における文法化のプロセスは(8)のような形態的特徴において類似するが、次のような例文においては相違点がみられると指摘する。

[結果持続]

(9)a. 책상 위에 텔레비전이 부서져 있다.

b. *机の上にテレビが壊れている.

[動作持続]

(10)a. 부엌 문 앞에 어머니가 책을 읽고 있다.

b. *台所の入り口の前に母が本を読んでいる.

(9)と(10)は「-어/고 있다」と「-ている」が用いられたアスペクト構文であるが、韓国語は正文であるのに対し、日本語は非文である。韓日両言語のアスペクト形式が(9)と(10)のような相違点を引き起こす理由について安(2001)は両者の文法化の度合いの相違点に起因すると主張する。安(2001)は(9)と(10)の動詞「부서지다(壊れる)」と「읽다(読む)」が持つ、いわゆる述語項構造(predicate argument structure)に注目する。述語項構造とは、当該の述語がどんなタイプの項をいくつ必要とするのかを表すことを指し示す。例を持ってこのことを説明する。「食べる」という動詞は「何か(x)が何か(y)を食べる('x eat y' または, 'eat(x, y)')という事態を示す表現である。このような何らかの事態を記述する表現のことを述語(predicate)と呼び、上述したxとyのようにこの事態の記述に必要な要素のことを項(argument)と呼ぶ。ここで(9)と(10)の「부서지다/壊れる」と「읽다/読む」の述語項構造を考えると、これらの動詞にとって格助詞「-에/に」は必ずしも必要とされる要素ではないため、「-에/に」はこれらの動詞の項構造には含まれていないのである。しかしながら、日本語と異なり韓国語は(9a)(10a)のように正文である。このことから韓国語の「있다」が日本語の「いる」と違い存在動詞としての用法がまだ強く残っており、機能語としての用法を完全に持っていないことが唆される。実際に、韓日両言語の存在動詞「있다/いる」は以下のように格助詞「-에/に」がその項構造に含まれていることが分かる。

(11)a. 교실 안에 학생이 있다.

b. *교실 안 학생이 있다.

(12)a. 教室の中に学生がいる。

b. *教室の中学生在いる。

他方、韓日両言語のアスペクト形式には前述した「-어/고 있다」と「-ている」の他にも、「-어 버리다」と「-てしまう」が挙げられる。これらの形式の文法化を取り扱ったのはStrauss and Sohn(1998)と呉(2004)である。これらの先行研究は共時的観点から日本語の「-てしまう」が韓国語の「-어 버리다」より文法化の度合いが高いと主張する。特に、Strauss and Sohn(1998)によると、このことは両者の音韻縮約(phonological reduction)における相違点から伺えると指摘する。「-てしまう」は(13)のように「-ちゃう」という音韻縮約形が存在し、「-てしまう」はより改まった公的な場面で用いられやすいのに対し、「-ちゃう」はより日常的で私的な場面において用いられやすいとされる(一色(2011))。

(13)a.子供たちが茶の間の壁に落書きを書いてしまったよ。

b.子供たちが茶の間の壁に落書きを書いちゃったよ。

Hopper and Traugott(2003)は、音韻縮約は子音や母音が落ちたり、アクセントがなくなって新しく形成された語へのアクセントの再調整が起こったり、隣同士の音韻が互いに同化しあったりすることをいい、文法化が進むにつれ助動詞によく現れる現象であると指摘する。また、Hopper and Traugott(2003)は語彙項目と接語が語幹、接辞として融合し形態素化するとき、さまざまな音韻変化が起こり、それらは音韻減少である場合が多いと述べる。このような現象は他の言語でも頻繁に行われる文法化の普遍的な現象である。次の例をみてもらいたい。

- (14)a. We are going to buy a car next year.
 b. We are gonna buy a car next year.

(14a)は「-するつもりである」という意味を持つ「be going to」が用いられた文であるが、「be going to」は(14b)のような音韻縮約形「be gonna」が存在する。英語の「be going to」も上述した日本語の「-てしまう」と同様に、「be going to」はより改まった公的な場面で用いられやすいのに対し、「-be gonna」はより日常的で私的な場面において用いられやすいと認められる。Hopper and Traugott(2003)はこのことを「信号の簡素化(signal simplicity)」と言い、速い会話において会話の信号を少なくしようとする傾向があると指摘する。つまり、「-ちゃう」のほうが「-てしまう」より、「be gonna」のほうが「be going to」より速い会話において話し手と聞き手にとってわかりやすい発話を実現することが可能であるということである。しかしながら、韓国語の「-어 버리다」は日本語の「-ちゃう」のような音韻縮約形が存在しない。このことは韓国語の「-어 버리다」が日本語の「-てしまう」に比べ文法化がそれほど進んでいないことを示唆し、「-어 버리다」は「-てしまう」より文法化の度合いが低いとすることができる。

2.3 文末形式

堀江・金(2008)は韓日両言語の文末形式である「것이다」と「のだ」の文法化の対照研究を行っている。特に、文法化理論において最近注目されている(15)の「主観化・間主観化」の仮説をもとに論じている。

- (15) 非主観的 > 主観的 > 間主観的 (Traugott(2003))

(15)において堀江・金(2008:85)は文法化における意味変化が、事象や状況の現実世界としての特徴に関わる意味から、話し手(書き手)の信念や態度を表す「主観的な」意味へと変化(主観化)し、さらに聞き手(読み手)の信念や社会的地位などに対する話し手の注意を表す「間主観的な」意味へと変化(間主観化)すると述べる。このような「主観化・間主観化」の観点から堀江・金(2008:85)は韓国語の文末形式の「것이다」は日本語の「のだ」より文法化の度合いが低いと主張する。まず、韓日両言語の「것이다」と「のだ」が示す「主観的」機能と「間主観的」機能の例文を以下のようにそれぞれ提示する。

[「主観的」機能]

- (16)a. 그가 왔다. 그가 정말로 내 앞에 나타난 것이다.

b. これ、私の国ではタッチョンイ・インヒョンという名前で親しまれている、紙粘土でできた人形

です、と言った。僕は慌てて、あ、日本人じゃないんだ、と間拔けな返答をしてしまう。

[「間主観的」機能]

(17)a. 만져버렸어. 그래서 그냥 산 거야.

b. あの日の紅に違いないのだが、ぼくは眠くて目を開けることができないでいる。

「起きなよ、潤吾。学校に遅れちゃうじゃない。いい子だから起きるのよ。」

(堀江・金(2008))

(16)は「것이다」と「のだ」が「主観的」機能を示している例文である。堀江・金(2008:87)によると(16a)は突然目の前に現れた「元彼」を見て話し手がもった「自分の目の前に元彼が本当に現れた」という(再)認識、(16b)は「紅」の発話を聞いて初めて話し手も「(彼女が)日本人ではない」という認識が現れている。他方、(17)は両者の「間主観的」機能の例文である。(17a)において普段暗い色の服ばかり着ていた話し手が、新しい服を買ったことを珍しいと思っている友達(聞き手)に向かって、服を買った理由を述べ、(17b)においては、女の主人公(話し手)は、男の主人公(聞き手)に向かって「起きる」ように働き掛けている(堀江・金(2008:87))。

堀江・金(2008)は韓日両言語の「것이다」と「のだ」が用いられた1,500文を対象にし、以下の(表2)のような相違点が見られると指摘する。

〈表2〉「のだ」と「것이다」の機能分類(堀江・金(2008:86))

	主観的	間主観的	合計
韓国語	31(70.5%)	13(29.5%)	44(100%)
日本語	46(43.4%)	60(56.6%)	106(100%)

〈表2〉から韓国語の「것이다」が日本語の「のだ」より文法化の度合いが低いことが伺えると堀江・金(2008)は主張する。第一の証拠は、韓国語の「것이다」が日本語の「のだ」に比べ、生起頻度が高いことである。すなわち、韓国語は44回用いられるのに対し、日本語は106回用いられている。2.1節でも述べたように文法化理論において「頻度効果」により当該表現の文法化の進度がどのくらい進んでいるのかを測定している。第二の証拠は、「主観的」と「間主観的」機能に分類した場合、「のだ」は「間主観的」機能の用例数が「主観的」機能の用例数より上回っているに対し、「것이다」は逆に「主観的」機能の用例数が「間主観的」機能の用例数より多く上回っていることである。このことは上述した(15)の仮説に照らし合わせてみると、韓国語の「것이다」が日本語の「のだ」より文法化の度合いが低いという結論に結び付くのである。

2.4 複合動詞

呉(2004)と塚本(2008)は、韓日両言語の複合動詞の文法化の対照研究を行っている。呉(2004)と塚本(2008)はそれぞれ異なるアプローチで分析を行うが、韓国語のほうが日本語より文法化の度合いが低いという点においては共通の認識を示している。呉(2004)の主張を引用すると、以下のようである。

動詞の取る形の中で文法化というプロセスがもっとも進んでいる複合動詞の後項要素と補助動詞を、韓国語と日本語の対照という観点から分析した結果、機能語化した後項要素や補助動詞における日本語の動詞の文法化は韓国語のそれより進んでいるが、韓国語の方は本来の動詞としての実質的な意味が残りその文法化の度合いが低いことが分かった。そのため、日本語の場合は韓国語の複合動詞の後項要素と補助動詞を用いて表現できないところまで幅広く表現できるので、日本語の機能語化した複合動詞の後項要素や補助動詞の文法的な意味の中には、対応する韓国語の動詞の形を持たず、統語論的な成分化し、修飾語句にやくされたり、複合動詞全体が一つの単純語として訳されたりするものが多くある。

(呉(2004:200-201))

呉(2004)は上記の主張を裏付ける証拠として日本語の複合動詞の後項要素である「-出す」「-切る」「-あがる/あげる」「-つける」と対応する韓国語の形態をそれぞれ提示する。本稿では「-つける」の場合をみる。次の例文を見てもらいたい。

(18)a. あまりしつけない仕事。

b. 그다지 해 보지 않아 익숙하지 않은 일.

(19)a. 飛行機に乗り付けているからなんともない。

b. 비행기를 타버릇 해서 아무렇지도 않다.

(呉(2004))

(18a)と(19a)の「-つける」は前項動詞の動作が何回も繰り返すことのできる意志的なもので、一回限りで終わらないものである。言い換えると、このときの「-つける」は「慣れて-する」や「いつも-して慣れている」などのようにアスペクト的な意味に文法化しているのである。これに対し、韓国語の場合、(18b)と(19b)でみられるように「-つける」に当たる後項動詞の表現はなく、「익숙하게-하다」「해버릇하다」のような連語の形が用いられるのである。このことから呉(2004)は日本語の複合動詞のほうが韓国語より語彙的な意味が薄れ文法化がもっと進んでいると主張する。

2.5 複合助詞

複合助詞とは、複数の語が結びつき、一つの助詞として機能しているものを指し示し、韓日両言語の複合助詞は下記のように対応している。

(20)a. 미국이 이라크에{대하여/대해/대해서} 선제공격을 했다.

b. 아메리카가 이라크에{対し/対して}先成攻撃をした。

(21)a. 이 기계는 꼭 설명서의 지시에{따라/따라서}사용하십시오.

b. この機械は必ず説明書の指示に従って使用してください。

(塚本(2009))

塚本(2009)は韓日両言語における複合助詞⁴⁾の文法化の対照研究を共時的アプローチで行い、韓国語

4) ただし、塚本(2009)は「複合格助詞」という用語を用いるが、本稿は便宜上「複合助詞」を使うことにする。

の複合助詞のほうが、日本語より文法化の度合いが低いと論じている。以下でその根拠をみってみる。まず、塚本(2009)は両言語の複合助詞の性質について以下のようにまとめている。

[日本語における複合助詞]

(22)a. 日本語における形式

- (i) 単一連用格助詞+動詞連用形
- (ii) 単一連用格助詞+動詞連用形+接続語尾「て」

b. 日本語における種類

- (i) ~に{あたり/あたって}、~にあって、~において、~に{応じ/応じて}、~に後れて、~に{限り/限って}、~に{かけ/かけて}、~に{関し/関して}、~に{先立ち/先立って}、~に{際し/際して}、~に{従い/従って}、~にして、~に{沿い/沿って}、~に{対し/対して}、~に{つき/ついて}、~に{つけ/つけて}、~に{つれ/つれて}、~に{伴い/伴って}、~に{とり/とって}、~に{のり/のりって}、~に{向かい/向かって}、~に{基づき/基づいて}、~に{より/よって}、~に{わたり/わたって}
- (ii) ~をにおいて、~を{介し/介して}、~をして、~を{通じ/通じて}、~を通して、~をはじめ、~を{踏まえ/踏まえて}、~を{めぐり/めぐって}、~をもって

[韓国語における複合助詞]

(23)a. 韓国語における形式

- (i) 単一連用格助詞+動詞連用形
- (ii) 単一連用格助詞+動詞連用形の縮約形
- (iii) 単一連用格助詞+動詞連用形(の縮約形)+接続語尾「서」

b. 韓国語における種類

- (i) -에{관하여/관해/관해서}、-에{걸쳐/걸쳐서}、-에{대하여/대해/대해서}、-에{따라/따라서}、-에{의하여/의해/해서}、-에 있어서、-에{즈음하여/즈음해서}、-에{한하여/한해/한해서}
- (ii) -를/을{비롯하여/비롯해/비롯해서}、-를/을{위시하여/위시해/위시해서}、-를/을{위하여/위해/위해서}、-를/을{통하여/통해/통해서}
- (iii) -로/으로{인하여/인해/인해서}、-로/으로 말미암아

また、塚本(2009)は韓日両言語における複合助詞は次のような相違点がみられると指摘する。第一に、韓国語で日本語に対応する複合助詞がないものが存在する。下記の例をみられたい。

[韓国語で日本語に対応する複合助詞がないもの]

- (24) ~に{あたり/あたって}、~において、~に{つき/ついて}、~に{つれ/つれて}、~に{とり/とって}、~に{わたり/わたって}、~を{めぐり/めぐって}、~を{もち/もって}、でもって、~として

第二に、数と種類において韓国語は比較的少ないのに対し、日本語は比較的多い。第三に、接続語尾「서」/「て」の付随において韓国語は付けずに表現することが多いのに対し、日本語は付けて表現することが多い。このように韓日両言語の複合助詞において相違を引き起こしている根本的な原因として、塚本(2009:12)は日本語の方が韓国語よりも文法化が生じている、といった文法化の進度の違いを導き出

することができる」と主張する。ちなみに、上記の第三の相違点は後の3節の(38)でみる5つの文法化の基準の中で三番目の「表示の義務性」によってさらにサポートされると考えられる。

2.6 補助動詞

塚本(2006)は韓日両言語の補助動詞「-어 오다/가다」と「-てくる/いく」構文の文法化について、呉(2004)は「-어 놓다/두다」と「-ておく」構文の文法化について共時的な観点から対照研究を行っている。呉(2004)と塚本(2006)は互いに異なる研究対象と分析方法で研究を行っているが、韓国語の補助動詞は日本語に比べ文法化の度合いが低いという共通の主張を出している。このことは韓国語の補助動詞「(-어) 놓다/두다/오다/가다」が内容語から機能語への文法化が完全に行われず、まだ内容語としての実質的な意味が残っていることからであると共通の認識を示している。例文をもってこのことを確かめる。まず、「-어 오다/가다」と「-てくる/いく」構文からみる。

塚本(2006)は日本語の補助動詞「-てくる」構文の用法を「移動」「継起」「継続」「出現」「開始」に分けており、韓国語の「-어 오다」は「移動」「継起」「継続」の用法までは「-てくる」と対応するが「出現」と「開始」の用法においては対応しないと指摘する。

[移動]

- (25)a. 駅まで歩いてきました。
b. 역까지 걸어왔습니다.

[継起]

- (26)a. 母が花を買ってきた。
b. 어머니가 꽃을 사 왔다.

[継続]

- (27)a. 先生は20年間もこの問題について研究してきた。
b. 선생님은 이십년 동안이나 이 문제에 대해 연구해 왔다.

[出現]

- (28)a. 前に進むと、海が見えてきた。
b. ?앞으로 나아가자 바다가 보여 왔다.
c. 앞으로 나아가자 바다가 보였다.

[開始]

- (29)a. 近頃、寒くなってきた。
b. *요새 추워져 왔다.
c. 요새 추워졌다.
(30)a. 急に雨が降ってきた。
b. *갑자기 비가 내려 왔다.
c. 갑자기 비가 내리기 시작했다.

「-てくる」と「-어 오다」は(25)-(27)における「移動」「継起」「継続」においては互いに対応するが、(28)-(30)における「出現」「開始」においては対応しないことが分かる。

次に、「-ていく」と「-어 가다」構文をみる。塚本(2006)は日本語の補助動詞「-ていく」構文の用法を「移動」「継起」「継続」「消滅」に分けており、韓国語の「-어 가다」は「移動」「継起」「継続」の用法までは「-ていく」と対応するが、「消滅」の用法においては対応しないと指摘する。このことを以下の例文で確かめる。

[移動]

- (31)a. 兄が部屋から出ていった。
b. 형이 방에서 나갔다.

[継起]

- (32)a. ここでちょっと休んでいきませんか。
b. 여기에서 좀 쉬어 갈까요?

[継続]

- (33)a. 大学進学希望者は今後一層、増えていく見通しである。
b. 대학교 진학 희망자는 이후 더욱 늘어 갈 전망이다.

[消滅]

- (34)a. 今年も多くの学生達が卒業していった。
b. ?올해도 많은 학생들이 졸업해 갔다.
c. 올해도 많은 학생들이 졸업했다.
(35)a. 近頃、社員が3人も辞めていった。
b. *요새 사원이 세 명이나 그만두어 갔다.
c. 요새 사원이 세 명이나 그만두었다.

「-ていく」と「-어 가다」は(31)-(33)でみられるように「移動」「継起」「継続」においては対応するが、(34)(35)でみられるように「消滅」においては対応しない。

最後に、「-어 놓다/두다」と「-ておく」構文についてみる。呉(2004)は日本語の補助動詞「-ておく」には次のような3つの基本的な意味があると指摘する。

- (36)a. ある目的のために
b. あらかじめ
c. 動作をする

(36)の意味は韓国語の「-어 놓다/두다」にも同様にみられるとされる。ただし、両言語には次のような根本的な違いが存在すると指摘する。韓国語の場合、文法化の進度が日本語に比べ低いいため、本動詞における実質的な意味の違いがそれぞれ違う語感を帯びている。例えば、「-어 놓다」はある状態から他の状態へと変化する状態の変化にその意味の重点が置かれ、「-어 두다」はすでに置かれている状態や変化後の状態を意識的に維持する状態の維持に意味の重点が置かれる。

3. まとめと展望

前節では韓日両言語における主な文法カテゴリーである(i)否定呼応表現、(ii)アスペクト形式、(iii)文末形式、(iv)複合動詞、(v)複合助詞、(vi)補助動詞の文法化の様態を探ってみた結果、本稿が2節の(1)で提示した主張が正しいことが明らかになった。以下で、本稿の主張を再び再掲する。

(37) [本稿の主張]

韓日両言語は形態類型論的に同一の膠着語に属するが、韓国語は多くの文法カテゴリーにおいて日本語より文法化の度合いが低い (=1)

ここで注意すべきことは、本研究では韓日両言語のすべての文法カテゴリーを対象に研究を行ったわけではないため、当然(37)が両言語のすべての文法カテゴリーに当てはまるわけではないということである。ただし、興味深いことは、筆者が多年にわたって収集し本研究で取り上げた6つのカテゴリーすべては文法化の度合いにおいて同様の現象が見られるということである。しかし、これらのカテゴリーが文法化の度合いにおいては相違点が見られるものの、「内容語」機能語」という同様の文法化のプロセスを示している。大堀(2005)はComrie(1998)とLehmann(1985)(1995)に従い、文法化の5つの基準を次のように提示する。

(38) [文法化の5つの基準]

- a. 意味の抽象性: 「밖에」や「(-て)しまう」などがその代表的な例であり、具体的な意味はなく、抽象的なものなどを表す⁵⁾
- b. 範列の成立: 複合助詞のように一定の文法機能を表し、相互に対立する少数のセットである
- c. 表示の義務性: 日本語の複合助詞の「-て」の付随のように、特定の形態素による表示がある機能を表すために要求されることである
- d. 形態素の拘束性: 補助動詞でみられるように、「自立語(動詞)から付属語(補助動詞)へ」という変化そのものである
- e. 文法内での相互作用: 否定呼応表現のようにある要素と要素が一致現象を示すこと

本稿で取り扱った韓日両言語の6つの文法カテゴリーは上記の文法化の5つの基準を同じく見出しているが、以下のような文法化の度合いにおいては相違点が見られるだけである。

(表3) 文法化の度合い(大堀(2005:4))

←低い		高い→
具体的	意味・機能	抽象的
開いたクラス	範列の成立	閉じたクラス
随意的	表示の義務性	義務的

5) 各基準における右側の説明は大堀(2005)の説明を本稿の内容に合わせて筆者が書き加えたのである。

自由形式	形態の拘束性	拘束形式
相互作用なし	文法内の相互作用	相互作用あり

ここで、次のような疑問点が浮かび上がる。というのは、「韓日両言語の6つの文法カテゴリーはどのような要因によって文法化の度合いにおいて相違点が生じるのか」ということである。このような疑問点は今まで数多く行われた韓日両言語の文法化の先行研究においては挙げられたことのないもので、興味深い研究課題である。韓日両言語が言語類型論的に同様の膠着語に属していることを考えると、文法化理論において解決しなければならない研究課題である。しかしながら、本稿では前述した疑問に関する正確な答えは与えられない。この理由は以下でまた詳しく述べるが、この研究課題は単一の要因のみでは解明できる範囲のものではなく、様々な研究アプローチで捉えないといけないものであるからである。ただし、現段階で考えられる分析方法を提案すると下記の通りである。

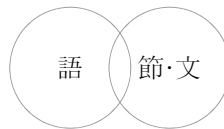
第一に、韓日両言語の形態論・統語論的相違点に起因した分析である。実際に、塚本(2008)は韓日両言語の複合動詞において相違点がみられるのは、以下のような両言語の形態論・統語論的仕組みの相違点に起因するからであると論じる。

(39)a. 日本語: 語と節・文が重なり合わさって融合している性質のものが存在する。

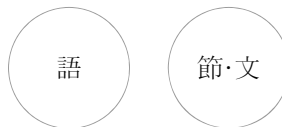
b. 韓国語: 語なら語、節・文なら節・文といったように語と節・文の地位をはっきりと区別する仕組みになっている。 (塚本(2008))

(39)を図で示すと次の通りである。

〈図2〉 a. 日本語



b. 韓国語



(同)

塚本(2008)によると、韓国語は〈図2b〉のように語と節・文とがはっきりと分けられているため複合動詞において日本語に比べ文法化の度合いが低いとされる。このような説明は非常に説得力があると考えられる。이성하(1998)も指摘しているように、文法化研究それ自体が人間言語の形態論の研究とともに発展してきたからである。しかしながら、このような説明のみでは本研究の疑問がすべて解決できるわけではない。その理由は、「否定呼応表現」、「アスペクト形式」そして「文末形式」などでみられる文法化は上

記の分析では説明できないからである。よって、本稿は次のような第二の分析方法を提案する。

第二に、当該項目の出現時期から探る通時的アプローチの分析方法である。Park(近刊)は「否定呼応表現」において、安・福嶋(2005)は「アスペクト形式」において日本語のほうが韓国語より出現時期が早いと指摘する。文法化の成立において時間的流れが重要な要素であることを考えると、当該項目の出現時期は両言語の相違点を探るに当って大切な項目であるといえる。以上、2つの分析方法を提示したが、これだけでは2.3節でみた「主観化・間主観化」の観点からの文法化の相違点は解明できないと考えられる。よって、本稿は次の第三の分析方法をも提案する。

第三に、「認知類型論」といった言語使用と社会的・文化的認知との相互関係をもとにした分析方法である。「認知類型論」とは、類型論的に異なる文法的特徴を有する言語間の構造的相違点・類似点を、その背後にある、当該言語間の社会・文化的側面を含めた広義の認知・伝達様式(認知スタイル)及び伝達習慣(コミュニケーション・プラクティス)の相違・類似と相関させて解明しようとする学問分野である。個別言語の文法・語彙構造には、人間言語としての共通性と、その言語の持っている「個(別)性」の両面があるが、認知類型論は、認知・機能主義的言語学と言語類型論の分析手法を複合させて、個別言語の文法・語彙構造、認知的・伝達の(語用論的)基盤の解明を目指す(堀江薫・ブラシャント(2009:2))。堀江・金(2008)も提案しているように、「主観化・間主観化」の観点からの文法化の研究はその研究課題の性質を考慮すると、上記の認知類型論からの分析方法が望ましいと考えられる。また、この分析方法を用いると、両言語のさまざまな文末形式、例えばモダリティ形式、終助詞などの文法化研究にも役に立つと考えられる。

以上、本稿は両言語の文法化の度合いの相違点を探るに当って3つの分析方法が用いられることを述べた。次は今後の課題について述べる。

1節でも述べたように文法化研究は1980年代に入り、欧米を中心に盛んに行われている。特に、言語類型論的な観点でさまざまな言語を対象にした興味深い研究が報告されている。しかしながら、本稿で提示したように言語類型論的に同一の言語がみせる文法化の度合いの相違点に関してはまだ未解決の研究課題が多く残されていると考えられる。本稿は韓日両言語における主要な文法カテゴリーの中で6つを取り上げ、韓国語の文法化の度合いが日本語より低いと主張した。しかしながら、上述したように韓日両言語におけるすべての文法カテゴリーを探ったわけではない。よって、ある文法カテゴリーにおいてはかえって韓国語が日本語より文法化の度合いが高い場合もありうると考えられる。このような文法カテゴリーを見つけ分析を行うと、本研究の課題を解決する糸口が得られるのではないかと期待される。また、上記で提案した3つの分析方法はどのような文法カテゴリーにどこまで適用できるのか詳しく論じていきたい。

【参考文献】

- 김영희(1998) 「부정 극성어의 허가 양상」 『한글』 240, 241 pp.263-297
 시정근(1997) 「'밖에'의 형태-통사론」 『국어학』 30 pp.171-200
 이성하(1998) 『문법화의 이해』 한국문화사
 安平鎬(2001) 『日韓両言語のアスペクトに関する対照研究—アスペクト形式の文法化を中心に—』 筑波大学大学院人文社会科学部 筑波大学博士(言語学)論文

- 安平鎬・福嶋健伸(2005)「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系-存在型アスペクト形式の文法化の度合い-」『日本語の研究』1:3 日本語学会
- 一色舞子(2011)「日本語の補助動詞「てしまう」の文法化:主観化、間主観化を中心に」『日本研究』15 高麗大学日本研究センター pp.201-221
- 大堀壽夫(2005)「日本語の文法化研究にあたって-概観と理論的課題-」『日本語の研究』1:13 pp.1-17
- 呉美善(2004)『日本語動詞の文法化に関する考察-韓国語との対照の観点から-』경희대학교출판국
- 金田一春彦(1976)「日本語動詞のテンスとアスペクト」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』27-61 むぎ書房
- 塚本秀樹(2006)「日本語と朝鮮語における複合格助詞再考-対照言語学からのアプローチ-」藤田保幸・山崎誠(編)『複合辞研究の現在』和泉書院 pp.285-310
- 塚本秀樹(2008)「日本語と朝鮮語における品詞と言語現象のかかわり-対照言語学からのアプローチ-」『アジア・アフリカの言語と言語学特集:品詞分類の多様性』3
- 塚本秀樹(2009)「文法化と形態・統語的仕組み-日本語と朝鮮語の相違を引き起こす要因-」『第17回中日理論言語学研究会ハンドアウト』
- 朴江訓(2013)「副助詞の文法化をめぐる」『韓国日語日文学会 春季国際学術大会予稿集』
- 堀江薫(2005)「日本語と韓国語の文法化の対照-言語類型論の観点から-」『日本語の研究』1:3 日本語学会 pp.93-107
- 堀江薫・金廷珉(2008)「主観化・間主観化」の観点から見た日本語・韓国語の文法現象」『言語』37:2 大修館書店。
- 堀江薫・ブラシャント・パルデシ(2009)『言語のタイプロジー-認知類型論のアプローチ-』84-89 研究社。
- 三上章(1972)『現代語法序説』くろしお出版
- Bybee, J. L.(2001) *Phonology and Language Use*. Cambridge University Press
- Bybee, J. L.(2003) Mechanism of Change in Grammaticalization: the Role of Frequency. In R. Janda & B. Joseph (Eds.), *A Handbook of Historical Linguistics*. London: Lawrence pp.602-623.
- Bybee, J. L. Pagliuca, W., & Perkins, R.(1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago and London: The University of Chicago Press
- Comrie, B.(1998) *Perspectives on Grammaticalization*. In Ohori(ed.) pp.7-24
- Hopper, P. & Traugott E. C.(2003) *Grammaticalization*. Cambridge University Press
- Lehmann, C.(1985) Grammaticalization: Synchronic Variation and Diachronic change. *Linguae stile* 20. 303-318.
- Lehmann, C.(1995) *Thoughts on Grammaticalization*. Munrich: Lincom
- Park, K.H.(2012) Grammaticalization of negative sensitive items pakkey in Korean and sika in Japanese. *New Reflections on Grammaticalization* 5
- Park, K.H.(近刊)A Discrepancy in the Degree of Grammaticalization of Korean and Japanese Negative Sensitive Items. *Japanese and Korean Linguistics* 22. Stanford: CSLI Publication
- Sells, P.(2001) Negative Polarity Licensing and Interpretation. *Harvard Studies in Korean Linguistics* 9. Susumu Kuno et al.(eds.). Dept. of Linguistics, Harvard University pp.3-22
- Strauss, S. and S. Sohn(1998) Grammaticalization, Aspect, and Emotion: The Case of Japanese -te shimau and Korean -a/e pelita. In Silva, D. J. (ed.) *Japanese and Korean Linguistics* 8. Stanford: CSLI Publication
- Traugott, E. C.(2003) From Subjectification to Intersubjectification. *Motives for Language Change*

〈 요 지 〉

**Grammaticalization in Korean and Japanese:
A Contrastive Study of the Degrees of Grammaticalization**

The purpose of this paper examines the following: (i) certain differences exist regarding degrees of grammaticalization between Korean and Japanese, and (ii) what factors cause the differences. The arguments of this paper are as followed:

- a. The degrees of grammaticalization of Korean are lower than the degrees of Japanese concerning 6 grammatical categories: negative sensitive items, aspectual markers, sentence-final forms, compound verbs, compound postpositions, and auxiliary verbs.
- b. The phenomena could be caused by the following three factors. The first factor is morphological and syntactic differences between Korean and Japanese. The second one is the discrepancy of the linguistic history as it appeared in the early Korean and Japanese literatures. The third factor is differences of language performance and socio-cultural cognition.

Field : Grammar

Keyword : grammaticalization, degrees of grammaticalization, frequency effects, morphological and syntactic differences, diachronic approaches

■ 박강훈 (朴江訓)

전주대학교 일본언어문화학과 조교수

hun0531@naver.com · hun0531@jj.ac.kr

- 投稿日 : 2013년 12월 20일
- 審査開始 : 2014년 1월 7일
- 審査完了 : 2014년 2월 3일
- 掲載確定 : 2014년 2월 18일